

幕末新人類伝

津本
陽



文春文庫

幕末新人類伝

定価はカバーに
表示してあります

1991年3月10日 第1刷

著 者 津 本 陽

発行者 豊田健次

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-731416-9

文春文庫

幕末新人類伝

津本陽



文藝春秋

幕末新人類伝

初出誌
單行本

別冊『潮』文芸特集、昭和61年8月、第5号
昭和62年2月潮出版社刊

昼すぎから吹きはじめた肌つめたい西風が、八つ半（午後三時）頃になるとつよまってきた、道筋の砂塵を捲きあげ、薄雲りの空に低い喚び声をあげていた。

伊集院亮助は、埃風をよけるために頬かぶりをして、薩藩京都今出川屋敷の裏木戸を出た。彼はともに探偵方をつとめる高崎栄次が、たくましい肩をゆすり門口に出てくるのを待つ。

「風がきつうごあんさ」

「うむ、冷えてきたな。今日は戻り道に木屋町へ寄ってんよかじゃろ」

高崎が陽灼けた顔に皺を寄せ、笑った。

「よかごわす」

亮助は笑い返す。二人とも齒なみがしろくそろっていた。

亮助は二十一歳、高崎は二十八歳。高崎は鹿児島に妻と一人娘がいる。

慶応三年（一八六七）十月五日であった。二人は北小路の薩州木場へ出向き、手先の金次に

会うのである。

薩州木場は、丹波の山方五十二カ村が共同で経営する、薩藩御用材を扱う店舗であった。木場には「御門札ならびに薩藩会符、提燈」が置かれ、薩摩屋敷と同様に、幕府権力の及ばない場となっていた。

亮助たちは、翌日早朝に薩摩屋敷にかくまっている、長州藩の品川弥二郎を護衛して、洛北岩倉村の中御門経之の別邸へ送りとどける任務を、与えられていた。

薩藩からは大久保一蔵が同行し、二人は中御門別邸で、岩倉具視と面談する。訪問の用件は、薩長二藩が共同して討幕の大業に踏みきる覚悟を、朝廷改革派の公卿、岩倉、中御門の二人に告げ、朝廷から討幕の宣旨をうける手順を、うちあわせることである。

薩摩と長州が、幕府を武力討伐するという具体的なうちあわせは、両藩のあいだで八月中旬になされていた。

西郷は薩藩独自でも、討幕を断行する意志をかためていた。まず国許より一個大隊千人の兵を上洛させ、その三分の一で御所を警衛し、正義派の堂上衆をすべて参内させる。

他の三分の一の兵力で京都守護職屋敷を急襲し、残る三分の一で二条城堀川の幕軍屯所を焼くという戦略であった。

さらに開戦と同時に、国許から三大隊の兵を軍艦で急派し、大坂城を攻略し、湾内の幕府軍

艦を撃沈する。

江戸表には定府^{じやうふ}在番藩士のほか、水戸天狗党崩れなどの浪士数百人がいるので、彼らを箱根山中の險にたてこもらせ、幕軍の上洛を阻止する。

西郷はこのような作戦を、勝敗の帰趨^{きすう}はわからないながら、断行するつもりでいた。

慶応二年十二月二十五日に、幕府に対する信賴があつく、公武合体の理念をつらぬいてきた孝明天皇崩御ののち、朝廷における改革派公卿の勢力は、一挙に増大していたが、全国二百六十諸侯の大半は、いまだ幕府指示の体勢を乱してはいなかった。

二百六十余年のあいだ、政権を担い、征夷大將軍の座を保ってきた徳川家の基盤は、一朝にくつがえすことは、困難であった。

現將軍慶喜が、たとえ大政奉還を実行しても、天下第一等の朝臣として、政治の実権を掌握してゆくにちがいない状況である。

薩長両藩と急進派公卿は、幕府を武力で粉碎しなければ、王政復古の革新を名実ともになしとげることはできないと、確信していた。

九月十一日、薩摩藩主の弟島津備後が、千余人の兵を率いて、京都に到着した。兵庫に入港、上陸した部隊は、戦闘をおこなう気組みで、殺氣立っており、幕府は不意の大兵の入京を阻止できなかった。

大坂から京都にむかう街道の要所、橋本、山崎、四塚、豊後橋、八幡、宇治橋などに、幕兵が詰めかけ、一時陰悪な空気がただよったが、何事もおこらなかった。

薩藩は、將軍徳川慶喜の巧みな政策実行の手腕によって、幕府の破綻をみちびきだすことができず、焦っていた。

慶応三年初頭、英米蘭仏の各国からの兵庫開港の要求に際し、薩藩は幕府に開港勅許を与えず、慶喜を失脚させようと図った。

だが、慶喜は朝廷に強硬にはたらしかけ、開港勅許を得た。

いま、慶喜は大政奉還によって主権を朝廷に返還し、実際には新政権の首長に就任して、旧勢力の温存をはかろうと企てていた。

伊集院亮助と高崎栄次が、烏丸からすま通りを南へ下ってゆく途中、遠近あちこちに群衆の喚声を聞いた。声は琵琶の弦をたわむれにはじくように、わあん、わあんといつづいている。

ひとつの抑揚をくりかえす声にまじって、残響のないきれぎれな太鼓と鉦かねの音が聞えていた。「今日も遣やっておっ」

高崎が笑って亮助をみる。

「毎日、世間は騒がしか。俺わいどま、気を許せん」

亮助がうなずく。

「まっこて、そじごあんす」

騒がしい物音は、ええじゃないか踊りの町人たちのものであった。

「ええじゃないか　ええじゃないか

おめこに紙はれ

破れりやまたはれ

ええじゃないか　ええじゃないか

という歌を高唱する群衆が、京都の街頭で狂ったように踊るようになったのは、八月二十八日の朝、若宮前西側の仏師京屋のまえに、外宮の神札が降ったのが最初であった。

空中より神札が降った家は、縁起がよいとよろこび、祭壇を設け酒肴を通りがかりの人にまでするまっけを祝う。

男は女装、女は男装して隊伍を組み、太鼓を打ち鉦かねを鳴らし、ええじゃないかの唄を高唱しつつ、市中を練り歩くのである。

泥酔乱舞する一隊が過ぎ去れば、また別の一隊がくる。往来にあふれ、軒先の垣をこわし天

水桶を蹴倒して踊り狂う男女は、夜になると頭上に紙の燈籠とうろうをいただき、花簪かんざしをうつくしく飾った。

名古屋にはじまった「お札降り」は、たちまち京都に至り、十月頃は商家の多い三条、寺町、堀川、五条辺りで頻繁に降った。

降ったのは神札のほかに、赤銅、木、石でつくられた大黒天像、蛭子えびす大黒像、蛭子と天満宮像、地藏、妙見宮像、布袋ほてい、毘沙門天びしゃもんてん、大日如来、清水観音などの像も降った。

一尺ほどの大きさのものもまれにあったが、おおかたは四寸から一寸の小さなものである。二分金、一朱銀、天保銭が添えられて降ったものもある。一軒の商家に五十九日も神札の降った例もあった。

五月末に、京都、大坂の盛り場に立てられていた、長州征伐の制札せいさくが取り払われてのち、米価は急速に下落し、秋になってさらに下げ足をつよめていた。

京都では、春には白米一石につき、銀一一四七・六匁もんめの高値にあった米が、秋には六三五・七匁に急落した。町人たちは物価急騰の苦痛から解きはなたれ、世直しが実現されたような錯覚を抱き、陽気になった。

高崎が、ええじゃないか踊りの喧噪けんそうに沸きたつ町なかに出ると、気が許せないというのは、混雑にまぎれ、幕府の刺客に斬られる懸念があるためであった。

薩長が同盟し、幕府を武力討伐しようと企てている事実は、当然幕府側にも覺られている。新選組、見廻組はもとより、二条城周辺に屯集する幕臣たちは、亮助たちを怨敵と憎んでいた。「京都は物騒じゃが、金に糸目をつけぬ遊びがでくつが、よかじゃ」

高崎は肩をゆすつて歩く。

大鬘おおいげんに髪を結いあげた高崎の、いかにも薩摩隼人はやとらしい獐猛どうもうな体つきをみると、町人はもとより、士分の者も道を避けた。

京都屋敷で、西郷吉之助、大久保一蔵らの指図をうける亮助たちは、幕府方の情勢探索に要する機密費を、過分にうけている。

一両で事が済む場合でも、思いきって届け書に用件を添え、五両と記し、会計方に差しだせば、帳面に署名をするだけで、なにも問わずに小粒を渡してくれる。

金を支払ったさきの受取書も、貰えるものは持ちかえればよいが、強いて取る必要はないとされていた。

いま、薩長は幕府を相手に、乗るかそるかの大勝負を挑む時機をむかえ、出費を惜しむ余裕はなかった。

長州藩では、百二十年間にわたり、年間十両を軍資金として貯蓄していたため、出費をさしひいても、六、七百万両の軍費を用意していたといわれる。

薩藩も、国許では藩士に節儉を強いていたが、京都では金子を湯水のようにつかい、人心を収攬しゅうらんすることにつとめている。

「西田の豚め、今日も祇園へいっておっじゃろ」

高崎は、吐きすてるようにいう。

西田の豚とは、亮助たちの上役にあたる、西田郁太郎であった。西田は三十五歳で、横目役をつとめている。

西田は京都での情報探索に、独得の手腕を発揮し、西郷、大久保らに信頼されていた。だが、政情の混乱に乗じ私腹を肥やす、武士にあるまじき行いを密かにしていた。

西田は江戸育ちで、言葉に薩摩訛なまりがなく、身許をいつわり、市中に潜行し、西郷らの望む情報をつとめてくる。

彼は市中のあらゆる場所に、手先の網をひろげていた。手先となつてはたらく者は、床屋、風呂屋などで、町奉行所、所司代、京都守護職の密偵をつとめる町人にまで及んでいる。

金にものをいわせ、二重スパイを手なずけていたわけで、諜報網の組織力では抜群の冴えを示していた。

だが、西田は武士としては墮落していた。

亮助たちが、探索に要する費用の水増しに馴れたのも、西田が平然と手本を示したからであ

る。

西田は、大勢の手先に与える報酬を水増しして会計方に請求する。さらに、京都市中の豪商たちに、攘夷浪士の押し借りなどの脅迫から護ってやると称し、金子を得ていた。

彼は貯めこんだ金を、仏光寺通りの妾宅に隠し、高利貸をしているといわれていた。高崎は、金銭に汚い西田を嫌っている。

高崎は城下士ではあったが、十五石取りの軽輩、貧窮に堪えてきたため、かえって金を不浄なものとする傾きがあった。

小姓組の高崎が、京都詰めとなったのは、慶応元年の春であった。おなじ軽輩出身の大番頭、西郷吉之助の推輓すいばんによるものであったが、その後の勤めぶりは精励するわりには、上司に認められてはいない。

薬丸自顕流の達者で、国許の郷中こじゆうでも乱暴者ぼつげもんの名を知られた高崎は、兵児へこ二才にせの教育を素朴に守る男であった。

「金銭を持つな、一人で買物をするな」

という郷中の掟おきてに従って生きてきた彼は、西田の遣りくちをまねて、余分な金子を持っても、貯めることを知らなかった。

高崎は好色ではなかったが、持ち金をすべてはたく豪勢な遊興を好んだ。酔うと、一軒の茶

屋ではあきたらず、祇園から二条、三本木、四条橋下と呑み歩き、夜をあかした。

泥酔した翌日は、高崎の顔は熟柿のようにあかぐろく、酒の香を濃くただよわせる。暗鬱な視線をむけられた朋輩は、喧嘩を吹きかけられまいと、あわてて眼をそらせた。

高崎が酔っても絡まない相手は、亮助のみであった。ただ、郷中での教育が頭に沁みこんでいる高崎は、屋敷うちでは刀を抜かなかった。

薩摩武士が郷中でうける教訓には、次のようなものがあつた。

「いかなる場合でも、刀を抜くな。抜けば、ただでは鞘に納めるな」

高崎はまた、「目上を重んじ、口答えをするではない」という訓戒をも重んじていた。

郷中とは、鹿児島城下に三十以上あつた方限ほうぎり（大字おおあざ）に設けられた、青少年を教育する教育機関で、若衆宿のようなものであつた。藩士の子弟は八歳から稚児として郷中に入る。

二十歳を過ぎ、兵児へこ二才にせの時期を終える二十四、五才まで郷中で文武の教導をうける。高崎は西郷吉之助にせがかつて二才頭にせがしらをつとめた、下加治屋町郷中の出身であつた。

彼は二才にせの掟おきてのとおり、西田の指図には異議をとえず従う。西田は高崎の兵児氣質をよいことに、彼の手柄をわが手柄といつわり家老職に報告する。

わが手柄としないときは、腹心の部下である内田万平、種村一の手柄にすりかえる。

高崎はそのような憎むべき西田の卑劣な行為を、上司に訴え出ることはなかった。すべてわ

が腹中に納め、ひたすら隠忍する。

しかし、憤懣ふんまんは酒席であらわれる。彼は、西田とともにいる酒の座で、過去に二度、大芋掘り（酒のうえでの大あばれ）を演じたことがある。

一度は今出川屋敷の、西田の座敷であった。高崎は西田と仕事のうえでの話しあいをするうち、些細な失態をつかれ、激しく叱責された。

高崎は一言もあらそわず、黙々と頭を垂れていたが、突然立ちあがり、唐金の獅子噛み火鉢をつかみ、頭上にさしあげるなり庭前へ放り投げた。

「何ばすつか、汝わいは血迷うたか」

西田は大喝したが、鼻さきをかすめ、桐の煙草盆が飛び、襖ふすまに大穴をあけるのを見るなり立ちあがり、はだして庭へ逃れた。

その場に居あわせた朋輩の、種村、内田も西田につづき走って難を避ける。彼らは、高崎が抜刀すると思つたのである。

三人は、日頃、命がけでかちえてきた高崎の探索の成果の、横取りを重ねてきた。東郷示現流、葉丸自顕流、小示現流の薩藩御流儀の名人として知られた高崎が、もし狂いたてば命はないと、恐怖したのである。だが、高崎は刀を抜かなかった。彼は西田の座敷の家具什器の一切を、木っ端微塵に打ち砕き、芯張り棒をふりかざして障子、襖、天井板まで打ち割ると、その